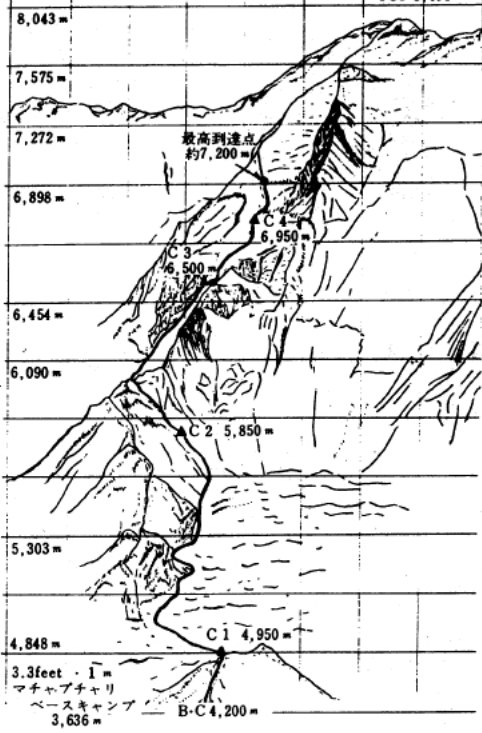


アンナプルナI峰南壁登攀ルート

TOP 8,091 m



て一番肝心な隊員の精神的、体力的な面からも二週間から二〇日か限界と考え、一挙に攻めることにする。

再度頂を目指して

B・Cの約十日間の休養は体力的な回復はあっても、すでに登山開始から一ヶ月半が過ぎており、精神的には辛い時期になってきているはずだ。そのために「早期決着」を図らないと、計画を達成できない危機感があつた。気を引き締めて、「再開」を全員で誓う。

十三日、登山再開。隊員五人とシルバ六人がC・1へ向かう。この日は、星野総隊長一行がB・Cを訪れ、隊員達を激励される。十五日、星野総隊長グループが歩いて下山。

B・Cからは前日に宮崎がC・1入りし、この日は八木原、松永、名塚が入る。「あと二週間あと二週間」と念仏のように呟る上、部キャンプ入りだった。

十七日、阿部、三枝がC・3入り、武田とシルバ五人がC・3への荷上げに向う。下山中に氷の塊が崩落し、シルバ二人の膝や足、腰に氷のブロックが直撃し、刻々とこのことでC・2に戻る。ケガもさることながら、彼らと他のシルバに与えた精神的ショックが我々にとっては痛かった。

二五日、B・Cは晴天だが、C・4あたりからは雲がかかって寒いと云う。ルート作業隊はテントを出るが直ぐ戻り、テントの中で身体を温めていると云う。進まない。この日は六〇mだけ。

午後からB・Cも雪に見舞われる。荷上げのシルバは手の指三本が凍傷にかかってしまった。

二六日、作業隊はC・4を出てはみるが、太陽の恵みを受けていない彼らは寒さのため直ぐにテントに戻ってしまう。どうも寒くてガマンならないのだと云う。然し、厳寒、烈風は百も二百も覚悟の上で、冬の八〇〇m峰に登りに来ているのだ、と叱咤する。技術的には問題ない。寒さだけの問題らしい。佐藤が手の指に軽い凍傷。

C・2からC・3へ荷上げに向かった宮崎は雪崩に襲われるが無事。シルバは怖がって荷物を途中に置いて逃げ帰ってしまう。B・エースの負傷は痛かった。何ん

この頃から雪が降り始め、大雪の様相。已む無く、隊は一時休養を決定し、一月三日迄に全隊員が各キャンプからB・Cに下って休養を取った。

一月三日に来た富岡芳山の人達が帰った六日過ぎになってアンナプルナに好天が戻ってきた。然し、作戦としてはこの好天気は待ちに待ち、次の悪天をやり過して再開することにした。

全く太陽の顔を見せず、雪が降り続くばかりだったのが、この日からは朝、曇り快晴、午後から曇つての小雪も、夜になると星が輝くと云った普通のパターンに戻ってきた。

十二日、翌朝からの登山再開に備え、午後はB・Cで全員ミーティング。装備、食糧の関係、そしてセルに三人が登る。

十六日、C・2からC・3へのルートも深雪のために一日では到達できないことが判つたため、ラッセルに三人が登る。

十六日、C・2からC・3へのルートも深雪のために一日では到達できないことが判つたため、ラッセルに三人が登る。

十六日、C・2からC・3へのルートも深雪のために一日では到達できないことが判つたため、ラッセルに三人が登る。

十六日、C・2からC・3へのルートも深雪のために一日では到達できないことが判つたため、ラッセルに三人が登る。

十六日、C・2からC・3へのルートも深雪のために一日では到達できないことが判つたため、ラッセルに三人が登る。

十六日、C・2からC・3へのルートも深雪のために一日では到達できないことが判つたため、ラッセルに三人が登る。

エピソード

隊長としての力不足、一市井登山家としても力不足をはっきり認識させられてしまったわけだ。涙を流したところで全く仕方ない事、とは云え私は胸のシンまで凍えるような寂寥を感じている。

予想外の冬の大雪に阻まれたのは云え、数多くの友人をヒマラヤや日本の山々で亡くし、私自身もヒマラヤの山中で凍傷にやられたり、雪崩とともに転落し九死に一生を得たりしながらの登山人生の中で、それらを差し引いても幸運な人生を歩めてきたと思つている。私自身の口から、このアンナプル

ナと云う八、〇〇〇m峰の大岩壁を冬期に登攀しようとする野心的な企てを、中止、すると云うのは本当に辛いことであつた。

我々が予想したヒマラヤ登山とは様相を異にし、強風と寒気はあまり感じられず、あまり降らないであらうと思つた雪が大雪山として襲つて来た。

登山が少しいとは云え、雪のことも注意をすべきであつたであらう。我々の側の数人の冬の経験だけで全てを判断した甘さもあった。

とにかく、五、〇〇〇mや六、〇〇〇mで全く手も足も出ずに敗れたのであれば簡単にあきらめがつくかも知れないが、七、二〇〇mまで達している。もう少し強く、多少の悪天にもガマン出来る隊員を集めれば一ヶ月以内での登頂が可能であると思えるため、一年間を空け、一九八六・八七年の冬にもう一度トライしてみるつもりである。結着をつけないうちは次に進めない。

そして隊長自ら頂上を踏む覚悟が必要であらう。

群馬県 冬期アンナプルナI峰登山隊員構成

総隊長 星野 光(51)
隊長 八木原 明(57)
副隊長 宮崎 勉(56)
副隊長 山田 昇(54)
隊長 松永 幸雄(56)
名塚 孝(29)
武田 芳政(28)
三枝 照雄(26)
木村 文江(28)
阿部 源(31)
清水 人志(29)
阿久沢 芳雄(27)
佐藤 光由(23)
新田 安紀芳(30)

高体連登山部からの報告

二四号第三面の執筆者が富山真となることを富岡真となつてしまひ、執筆者はじめ各位に大変迷惑をかけてしまひました。

あかぎ団体後ようやく三号目を発行できました。三〇号まで発行出来たが、それまでのバックナンバーを集めて製本したいという希望をもっています。原稿募集等に一層の御協力を。